授業研究

地理

世界の諸地域　アジア州
―産業発展と人口増加が急速に進む南アジア―

神奈川県　横浜市立金沢中学校　主幹教諭　**井上 弘毅**

1　はじめに

2023年、インドの人口が中国を上回り世界第１位となった可能性が大きいという報道があり、大きな話題を呼んだ。当初の予想よりも数年早く世界最多となったこともあり、人口14億人を超えるインドに改めて世界の注目が集まったニュースであった。

近年、経済成長の著しいアジアの国として、中国と並び国際的に存在感を示しているインドであるが、特別な理由がなければ、中学校１年生がインドについて持つ知識は、隣国の中国についての知識に比べて圧倒的に少ない。そして、この傾向は、社会科を担当する私自身も同様であった。そこで本稿では、アジア州の学習において、特に南アジアに位置するインドにスポットを当て、地図帳の統計資料や主題図を活用しながら、生徒とともにインドについて学んだ授業事例を報告したい。

南アジアの学習を始めるにあたって、最初に「インドといえば？」と聞いたところ、生徒からはやはり「人口世界第１位」という声があがる。ほかには、「カレー」「ヨガ」「ガンジー」などインドを代表する文化や偉人などがあげられた。

2　導入　インドは世界で第何位？

「次の農産物や鉱産資源は、インドでの生産量が世界でトップクラスのものです。さて、それぞれ何位にランクインするでしょう？」

授業の導入で、インドで生産される農産物や鉱産資源が世界で第何位か、予想させるクイズを行った。あくまでも導入での予想なので、あまり多くの時間はかけず、地図帳を開かせずに簡単に予想させた。

クイズに登場させた農産物や鉱産資源は次のとおりである。

米・茶・小麦・じゃがいも・バナナ・さとうきび・綿花・鉄鉱石・石炭・ボーキサイト

答え合わせには、『中学校社会科地図』（以下、地図帳）p.170の帯グラフを示した（**図１**）。すると、「インドの紅茶は有名！」「ナンでカレーを食べるのはウマい」「バナナはインドが１位なの！？フィリピンが１位だと思っていた」など生活経験に基づいた楽しい声が聞こえてくる。地理的分野では生徒の生活経験と学習内容が結び付いたときに、学習により前向きになると感じる。さらに、農産物の統計資料を見ることは、その地域の気候をおおまかにとらえるのに大変有効といえる。先のバナナが世界第１位の発言をした生徒は、「さとうきびもたくさん作って

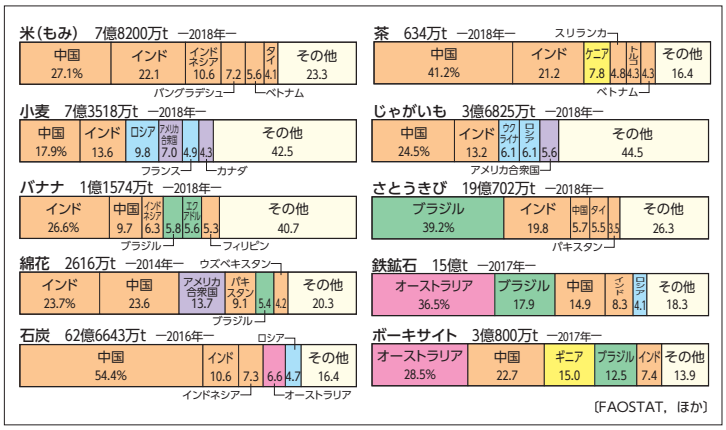

図１　『中学校社会科地図』p.170「世界のおもな農林水産物・食料品、鉱産資源の生産」（一部抜粋）

いる！」と発言していた。この発言から、インドには熱帯に属する地域があることを農産物から理解できたと推察できる。

また、インドの綿花生産が世界でトップクラスであることも本授業でしっかり確認をしておきたい。南アジアの繊維産業は、地理的分野のみならず、歴史的分野・公民的分野の学習においても重要なポイントとなるからである。

3 主題図を読み取る

図１の帯グラフを見ると、インドが中国と肩を並べるアジアの農業大国であることが読み取れる。生徒からは、「インドも中国も、14億人の国民を養うためには、農産物をたくさん作らないと！」という声があがった。そこで、巨大な人口を抱えるインドの農業について、どの地域で何が生産されているか、地図帳p.39の二つの主題図を読み取らせた（図２・３）。

二つの主題図を読み取らせる際には、ワークシートに掲載した白地図※を活用した（ワークシートは本誌p.19のQRコードのリンク先参照）。生徒に示した学習課題は、「二つの主題図にある情報を一つの白地図にまとめて、気付いたことを書きなさい」というものである。その際、必ず記入するように指示をしたのは、米・小麦・綿花・年降水量1000㎜の項目である。

白地図の記入を終えた生徒は、気付いたこととして「綿花は年降水量が1000㎜未満の乾燥地帯で栽培が盛ん」「米はガンジス川の近くや年降水量が1000㎜を超えるところで作られている」「小麦は北西部で作られていて綿花の栽培地域と重なるところもある」など、南アジアの農業地域の特徴を降水量との関係から読み解いていた。

さらに、先ほどの生徒は図２・３以外の主題図も見て、次のように記述した。

※白地図は帝国書院ウェブサイトより利用できる。

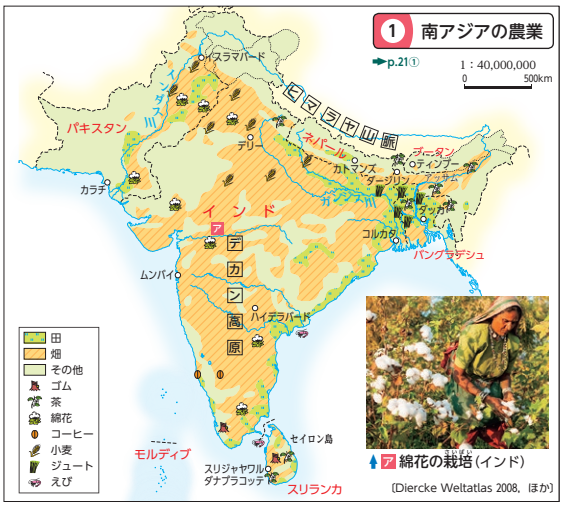

図２ 『中学校社会科地図』p.39「①南アジアの農業」

図３ 『中学校社会科地図』p.39「②南アジアの米と小麦の生産」

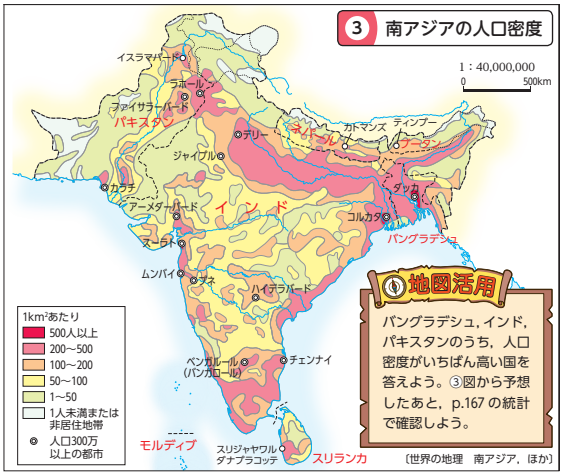

図４ 『中学校社会科地図』p.39「③南アジアの人口密度」

地図帳p.39の主題図「③南アジアの人口密度」（図４）も併せてみると、14億人も人口のいるインドは、図３で年降水量の多い地域は人口密度の色が赤く

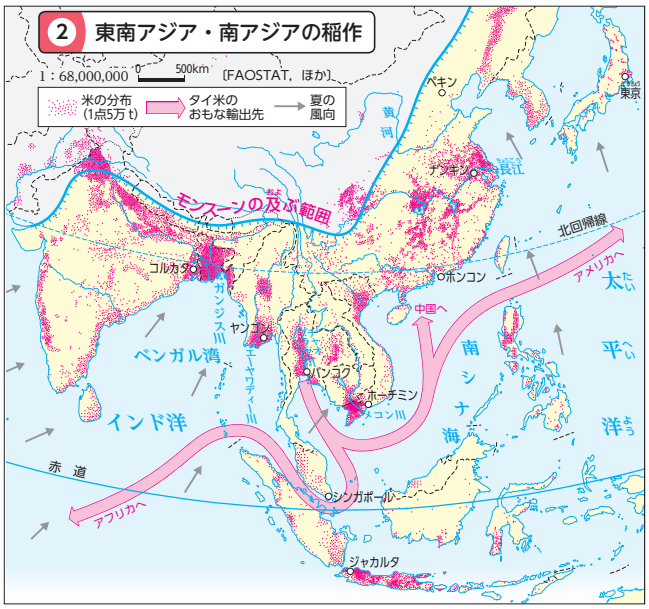

図５　『中学校社会科地図』p.35「②東南アジア・南アジアの稲作」

正式国名	人口（万人）2018年
インド	129,804
インドネシア共和国	26,416
中華人民共和国	①142,443
日本国	②12,744
バングラデシュ人民共和国	16,460
フィリピン共和国	10,659
ベトナム社会主義共和国	9,466

図６　『中学校社会科地図』p.167「世界の統計（１）」（一部抜粋して作成）

なっていて人が多く住んでいることが分かるけれど、そうでないところは黄色や黄緑色になっている。インドでも、乾燥地帯はそんなに人が多くないのでは？と思う。

なかには、地図帳p.35「②東南アジア・南アジアの稲作」（図５）の主題図と地図帳p.167「世界の統計（1）」（図６）を参照して、次のような記述をした生徒もいた。

アジアでは、「モンスーンの及ぶ範囲」の中で稲作が行われている（図５）。その場所では、お米をよく食べているけれど、アジアの中で人口が多い国（１億人以上）（図６）は、大体この範囲の中にある！？

生徒が地図帳の主題図や統計資料を読み取ることによって、アジア州における人口の多い国々の共通性に気付いた大変鋭い記述である。

4 南アジア　学習のまとめ

主題図や統計資料の読み取りを行ったうえで、南アジアの学習のまとめとして、近年経済成長が著しいインドの産業について、次のようなレポートの作成に取り組んだ。

- **インドでは、なぜ急速な経済成長ができたのだろうか？**
- **経済成長の結果、インドにはどのような変化が起きているのだろうか？**

『社会科 中学生の地理』には、急成長した情報通信技術（ICT）関連産業の資料が載っていることもあり（図７・８）、生徒の記述には、ICT関連産業の隆盛がインド経済の成長を支えたというような内容が多く見られた。次に実際に、生徒が作成したレポートの事例を紹介したい。

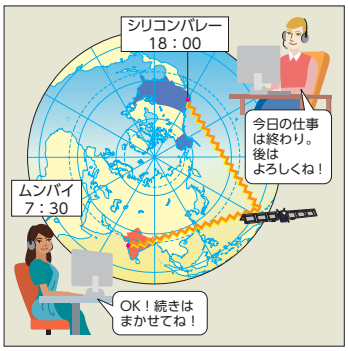

図７　『社会科 中学生の地理』p.61「4時差を利用したアメリカ合衆国とインドとの仕事のやり取り」

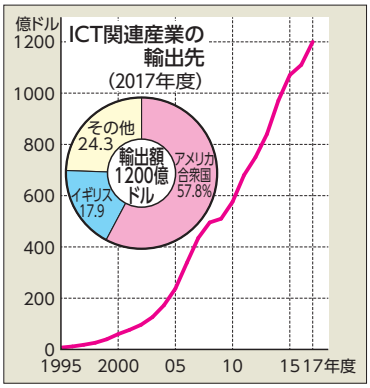

図８　『社会科 中学生の地理』p.61「6インドのICT関連産業の輸出額の推移と輸出先」

5 作成レポートの事例

ある生徒は、経済成長の一方でインドが抱える課題に着目して次のように記述した。

インドが急速に経済成長できたのは、ICT関連産業に力を入れたからだと思う。アメリカと時差が約半日ずれていること（図7）や、英語を話せる人が多いこと、カーストの影響をあまり受けないこと、国や州がエンジニアを育てる教育機関をたくさん作ったから成功できたと思う。

経済成長して、インドは人口も増えているし、生活が豊かになった人もいるけれど、貧困層を減らす取り組みが行われているように（写真）、農村の方は、貧しい人々もいて、大きな経済格差があるようだ。

写真　『社会科 中学生の地理』p.61「9読み書きを習う農村部の女性たち」

また、これまでに活用した主題図や統計資料を振り返りながら、次のようなレポートを書いた生徒もいた。

インドは、もともと鉱産資源も豊富で、人口も多かったと思う。だから、もともと経済が発展するパワーがあったのではないか。まだ国が貧しかったころには、最初に農業を盛んにして、食料を増やして、人口が多くなってから、最近になってスマートフォンやパソコンなどの産業に力を入れて成功したのだと思う。でも人口が多いから、農業は今でも結構力を入れていると思う。

ICT関連産業の成功で、インド全体は豊かになったように見えるけれど、人口の多い都市部は人がいっぱい集まっているけれど、農村は人が少なくて貧しい人もいると思う。多分降水量が少ないところは、生活が厳しいのではないかと考えた。

これらのレポートは、ICT関連産業を主力としたインドの経済成長の特徴や、人口増加と食料生産の関係、経済成長の結果としての貧富の差の拡大などに言及している点が高く評価できる。

6 評価について

評価については、「白地図の記入」と「学習のまとめのレポート」を主に評定に用いる評価資料として取り扱った。白地図の課題では「知識・技能」、まとめのレポートでは、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価を行った。「知識・技能」については、インドの産業の特色やインドが抱える課題を理解しているかどうか、「思考・判断・表現」については、インドの経済発展とそれに伴う影響を多面的・多角的に考察し、表現しているかどうか、という評価規準とした。

「主体的に学習に取り組む態度」については、「レポートを終えて、新たに浮かんだ疑問」の記述をさせた。学習のまとめに生まれてくる新たな疑問が、生徒をさらに深い学びへ前進させると考えたからである。

最後に、生徒の記述を紹介して終わりたい。サービス業を主体として経済成長したインドの特色や、経済成長と人口の増減に言及した鋭い疑問といえる。

インドがICT関連産業に力を入れて、経済成長に成功したのは分かったけれど、スマホやパソコンにインドで作られたモノは、あまり見たことがない。やはり、中国で作られたモノが多い気がするけれど、それがなぜだか分からなかった。

日本は人口が減って大変だというけれど、インドはその反対で人口が増えて大変になっている。人口が減って困るところもあれば、人口が増えすぎて困るところもあり、何でそんなことが起きるのか疑問だった。

帝国書院のWebサイトに、
ワークシートを掲載いたします。